

依存症の回復過程と支援の在り方 ～自助グループの原則と事例を通じて～

経営学部 経営学科 新井ゼミ
B4R11028 江原佑介

【卒業論文概要】

「人間やめますか？それとも、クスリやめますか？」この言葉を耳にしたことはあるだろうか。これは、薬物依存患者に対して提示された言葉である。

平成26年のデータによると、薬物での検挙人数は13,000人にも及んでいる。最近では、某二世タレントの芸能人や元プロ野球選手が、この薬物の所持により捕まる事件があったため、ニュースや新聞で目にした人も多いだろう。私もその一人で、誰もが陥ってしまう可能性のある依存症についてもっと深く知りたいと思い、このテーマを選ぶこととした。

まず初めに依存症とは、日常生活において支障をきたしているにもかかわらず、お酒やタバコ、ギャンブル、買い物といったものなどにのめり込み、それがやめられずに自分の力だけではどうにもならない状態のことをいう。依存症には、物質依存・プロセス依存・関係依存の3つのグループに分けることができるが、その中でも特にアルコールやタバコ、薬物が含まれる物質依存に着目して本論文では述べることとする。

本論文の目的は、片田珠美（2007）の「やめたくてもやめられない～依存症の時代～」や中本新一（2009）の「脱アルコール依存社会をめざして」を先行研究とし、依存症患者の回復過程を述べていくとともに、依存症患者から更生し、普通の生活に戻ることができた人がいる一方で、再度薬物に手を出してしまい、再び依存症患者として生きていかなければならない人が出てきてしまうのは、どのような要因から生じるものなのかを仮説とし、両者間における違いをいろいろな視点から考察し明らかにすることである。

一つ事例を挙げれば、この差は周りのサポートの違いによって生まれているとしている。依存症に陥る原因として社会からの孤立感によりというのが大前提にあるが、依存症から立ち直ったとしても今の社会はまだ一回依存症になった人に対し、根強い偏見を持っている。そのため、また孤立感が生まれ再度手を出してしまう負のスパイラルに陥る傾向にある。

そしてそこで重要とされているのが自助グループ（別名セルフヘルプグループ）であり、医者への存在だけに頼るのではなく、同じような境遇の人と悩みを共有し、繋がりを持たせることで、自ら問題への取り組みの姿勢や理解の仕方が改善され、自己変容的な成長が期待されるとしている。岡知史（1999）の「セルフヘルプグループ：わかちあい・ひとりだち・ときはなち」を先行研究とし、今後さらに自助グループとして回復に向けて期待することを課題として提示した。